

## “福島第一原発観光地化計画”とは何か

### What is the Meaning of “A Plan to Make Fukushima Daiichi Nuclear Plant Tourist Attraction” ?

井出 明<sup>1</sup> 梅沢 和木<sup>2</sup> 開沼 博<sup>3</sup> 清水 亮<sup>4</sup>  
津田 大介<sup>5</sup> 速水 健朗<sup>6</sup> 藤村 龍至<sup>7</sup> 東 浩紀<sup>8</sup>

Akira IDE<sup>1</sup> Kazuki UMEZAWA<sup>2</sup> Hiroshi KAINUMA<sup>3</sup> Ryo SHIMIZU<sup>4</sup>  
Daisuke TSUDA<sup>5</sup> Takeru HAYAMIZU<sup>6</sup> Ryuji FUJIMURA<sup>7</sup> Hiroki AZUMA<sup>8</sup>

<sup>1</sup> 追手門学院大学 経営学部

Faculty of management, Otemon Gakuin University

<sup>2</sup> カオス\*ラウンジ

CHAOS\*LOUNGE

<sup>3</sup> 福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター

Fukushima Future Center for Regional Revitalization, Fukushima University

<sup>4</sup> ユビキタスエンターテイメント

Ubiquitous Entertainment

<sup>5</sup> ネオログ

neo-logue

<sup>6</sup> フリー編集者

Freelance Editor

<sup>7</sup> 東洋大学 理工学部

School of Sciences and Engineering, Toyo University

<sup>8</sup> ゲンロン

Genron

The Great East Japan Earthquake caused an accident at Fukushima Daiichi Nuclear Plant, and it marked an important turning point in the history of civilization. However, few discussions have focused on methods of conveying the accident to future generations and utilizing the area. Anxious about this insufficiency, Dr. Hiroki Azuma, a philosopher, conceptualized a plan to make Fukushima Daiichi Nuclear Plant a tourist attraction, along with his old cultural friends and new friends whom he needs for this project. This paper discusses the essence of the project and analyzes social value considering the state of Fukushima 25 years into the future.

**Keywords :** *tourism , Fukushima Daiichi Nuclear Plant, Recovery*

#### 1. 発案の経緯

2011年3月11日に発生した東日本大震災と、それに続く福島第一原発の事故は、日本の歴史の大きな転換点といえる。これまで絶対に安全だと言われていた原子力発電所がアンコントロールな状態になるなど一体誰が予測しただろうか。

現実には起こってしまった原発事故について、政治的な立場を超えて事故の全貌を後世に伝えるとともに、社会的な解釈を与えることは、今後の福島の復興を考える上では避けて通れない道程である。25年を経て除染が進んだ時、多くの人々がこの地を訪れ、この地で何かを考えるような仕組みを作っておくことは重要であり、我々はこの仕組みをさして「観光地化計画」と名付けた。

#### 2. メンバーの構成

本プロジェクトは、提唱者である思想家の東浩紀がリーダーとなりメンバーを束ねている。他のメンバーの専門領域は多岐にわたるが、建造物のランドデザインをするために建築家の藤村龍至が参加している。また、現地にはモニュメントが必要となるため、現代美術家として梅沢和木が名を連ねている。さらに、この地にショッピングセンター等を展開させる為に、当該分野に明るいフリー編集者の速水健朗が知恵を出す。社会学の領域からは、『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』で毎日出版文化賞を受賞した開沼博が地元出身者の立場も踏まえた議論を展開している。メディア・アクティビストの津田大介は頻りに現地に入り、地域の声を聞きつつ、積極的な情報発信を行なっている。東とともに未来都市論を語り合った清水亮は、復興におけるIT産業の位置づけを検討した<sup>(1)</sup>。最後に、観光学者の井出明は

遅れてこのチームに参加し、ダークツーリズムの手法に基づいた福島第一原発の観光地化についての考察を行っているところである。

### 3. 活動内容

本プロジェクトは2012年の秋に始動し始めた。初期段階では、何人かのメンバーが南相馬に入り、現地の人々とのワークショップを展開した。12月には、ダークツーリズムの学習会を行い、井出がセミナーの講師を務めるとともに、この後まもなくコアメンバーとしてチームに合流した。年明けからは、アイデアを具体化するために藤村が模型を作り、議論を深めていった。3月には記者発表を行なっているが、東と清水が経営するゲンロンカフェにおいて、一般向けのセミナーを開講し、フェイス・トゥ・フェイスの啓発にも取り組んできた。4月には、東・開沼・津田がチェルノブイリを訪問し、爆発事故を起こした原子力発電所の27年後の姿を調査している。そして、これらの活動の集大成としての書籍が、2013年の6月と7月に2分冊で出版される予定である。

### 4. メディアおよび地元住民の反応

前述のとおり我々はすでに記者会見を行なっているが、リアルベースで本計画の真意を伝えることが出来た記者たちには、非常に好評を博すことになった。また、やはりリアルにこの計画について話すことの出来た被災者たちからも大きな反発の声は上がっていない。しかし、伝聞情報としてこの計画のタイトルだけを耳に入れたメディアや震災に関連する人々の間からは、「不謹慎だ」という声が聞かれることも記しておく。今後の課題としては、我々の理念がより広範に伝わるような伝播の仕組みを考えなくてはならないであろう。

### 5. 計画の概略

「観光」という言葉は、レジャーや娯楽の一環として捉えられがちなため、4. で触れたような拒否反応が生じることはメンバーも予測していた。

しかし、本計画は、福島第一原発の25年後を単に物見遊山の対象として捉えているわけではない。我々の計画では、事故博物館や記憶を継承するためのモニュメントの設置も考えている(図1,図2)。一般に悲劇の場所を訪れる観光は、「ダークツーリズム」と呼ばれているが、ダークツーリズムポイントは、決して教訓のためだけに存在しているわけではなく、消費や娯楽と相乗的な効果を生じさせている所も多い<sup>2)</sup>。例えば、サイパンの戦跡は、単独では訴求力が弱いと思われるが、免税店やビーチリゾートとがあるからこそ、多くの来訪者を生み出しているという分析も成り立ちうる。ダークツーリズムを考える際に、エンターテインメントやレジャーの要素をはじめから取り除いて検討することは、論理的な必然性がないのである。

また、事故の記憶の承継には、「モノ」の保存が必須であるが、これは事故の発生後、かなり早い段階から意識しなければ散逸する可能性が高い。問題意識を社会で共有するためにも、本プロジェクトの問いかけは意義を持つ。

人類史上、福島の地は極めて稀な「原発事故」を経験してしまっただが、その復興過程を Tourism Resource として積極的に捉えることで、新しい地平が見えてくると言えよう。

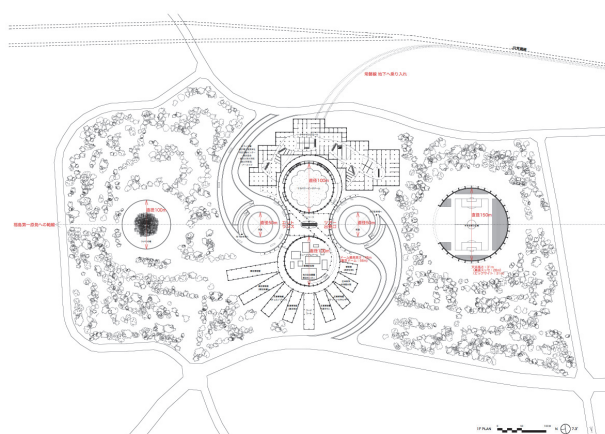


図1 全体構想図1 (藤村龍至作)

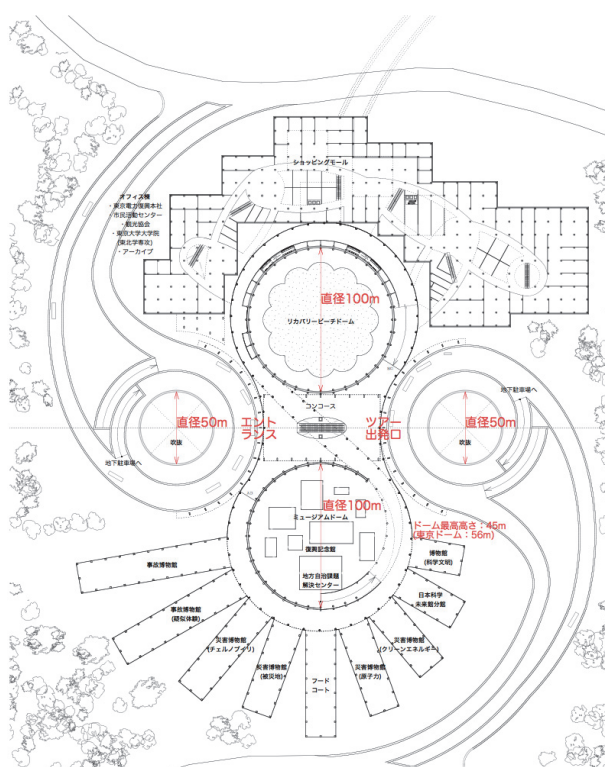


図2 中心施設部分の構想図 (藤村龍至作)

(注) 当事者性の問題について

本計画を実行するにあたって、地域住民とのワークショップやメディアでの広報活動を展開していると、現地の方から「そんなことを言うなら、ここに住んでみたらどうか」や「東京の関係のない人間が安全なところから口をだすべきではない」という意見をいただくことが多い。しかし、都市部の住民は、近代化の過程において電力のみならず、労働力などのリソースを地方に頼っており、今回の福島第一原発の事故についても、都市文明の維持のために福島に過剰な負担をかけた結果であるという考え方も成り立ちうる。都市文明の享受者は、福島の人々を「遠くにいる気の毒な人達」と捉えるべきではない。都市に生きる人々は、このような事態を招いてしまった“当事者”としての意識を共有すべきである。

#### 参考文献

- (1) 週刊アスキー2007年12月11日号別冊 アスキー (2007.12.)
- (2) 井出明「ダークツーリズム入門#1 ダークツーリズムとは何か」『ゲンロンエトセトラ』Vol.7 ゲンロン (2013.4.) (2013.4.13.投稿)